小學文例珠璣

二

村田忠恕編輯

書籍之證

文部省書庫

原一五八三號 類 屬 方五 面 一 架 七 號 六 冊

第 號 共六冊

小文例珠璣卷之二目錄

譯語

教授法

第一　類題

第二　紙鳶ヲ贈ル詞

第三　文題ヲ贈ラレレニ謝スル詞

第四　梅見ニ人ヲ招ク詞

第五　博物館同道ヲ問合スル詞

第六　氷ヲ餉ル詞

第七　入門通知ノ詞

文部省普通學務局

第七　地圖ヲ返ス詞
第八　來書ニ答フル詞
第九　博多織ヲ贈ル詞
第十　淺草ヘ同道ヲ約スル詞
第十一　仕立物ヲ賴ム詞
第十二　郵便印紙ヲ乞フ詞
第十三　疎音ヲ謝スル詞
第十四　毬ヲ贈ル詞
第十五　馳走ニナリシヲ謝スル詞
第十六　桃枝ヲ贈ル詞

第十七　薄待ヲ謝スル詞
第十八　無事ヲ告クル詞
第十九　品物ヲ贈ル詞
第二十　來書ニ答フル詞
第二十一　品物ヲ餽ラレシニ謝スル詞
第二十二　石版及ビ石筆ヲ購フ詞
第二十三　天長節祝ヒノ詞
第二十四　使者ヲ遣サレシニ謝スル詞
第二十五　呉服類ヲ取リニ遣ス詞
第二十六　人ヲ招ク詞

第二十七　賴置キシ事ヲ問合セル詞
第二十八　人ニ贈スル詞
第二十九　起居ヲ問フ詞
第三十　饗應ニナリシヲ謝スル詞
第三十一　品物賣捌先キヲ問合セル詞
第三十二　散歩ヲ斷ル詞
第三十三　發足日限ヲ問合セル詞
第三十四　牛乳賣捌所ヲ通知セシヲ謝スル詞
第三十五　欠席ヲ告クル詞
第三十六　算術書ヲ借リニ遣ス詞

第三十七　新茶ヲ贈ル詞
第三十八　遊歩ヲ約スル詞
第三十九　螢狩誘引ノ詞
第四十　新聞紙ヲ借リニ遣ス詞
第四十一　同道ヲ賴ム詞
第四十二　來駕ヲ乞フ詞
第四十三　讀書會ヲ催ス詞
第四十四　病氣見舞ニ答フル詞
第四十五　寫眞ヲ贈ル詞
第四十六　留守ノ事ヲ託スル詞

第四十七　書籍ヲ贈ラレシヲ謝スル詞
第四十八　同伴ヲ約スル詞
第四十九　使者ヲ遣サレシニ答フル詞
第五十　書籍質問ノ時刻ヲ問合セル詞

口上書

文例

教授法

類題

第一　新年紙鳶を贈る文
第二　年玉として羽子板を贈られしを謝する文

第三　併子遊に友を招く文
第四　春寒く見舞之文
第五　氏神祭禮に人を招く文
第六　初午之赤飯を餉られしを謝する文
第七　梅見に人を招く文
第八　梅花を贈られしに謝する文
第九　花見催し之文
第十　友人之觀花を但に答る文
第十一　彼岸之重之内を餉る文
第十二　筍を餉る文

第十三 新菜ニ餉る文
第十四 初茄子ニ餉る文
第十五 杉魚ニ餉られしに謝する文
第十六 納涼誘引ニ答る文
第十七 螢狩誘引之文
第十八 枇杷ニ餉る文
第十九 松茸ニ贈られしに謝する文
第二十 野菜ニ餉る文
第二十一 秋海棠ニ餉る文
第二十二 樽柿ニ餉る文

第二十三 爐開ニ客ニ招く文
第二十四 夜學ニ催す文
第二十五 抽實ニ餉る文
第二十六 雪中水仙花ニ餉る文
第二十七 入學を一ニ通知する文
第二十八 書籍ニ借りニ遣す文
第二十九 筆并術之答ニ贈るニ添る文
第三十 試驗之時日ニ問答する文
第三十一 寄留替通知之文
第三十二 轉宅ニ賀する文

第三十三　安否ニ問フ文
第三十四　牛肉ニ餉フ文
第三十五　写真ニ贈フ文
第三十六　来話ニ乞フ文
第三十七　出立之時日ニ問合セル文
第三十八　別後友人ニ寄セル文
第三十九　帰宅ニ告ク文
第四十　雑誌ニ借リニ遣セル文
第四十一　外国新聞ニ贈フ文
第四十二　漁魚ニ餉フ文

第四十三　提灯ニ返セル文
第四十四　仕事始ニ賀セル文
第四十五　乾海苔ニ餉ラレニ謝セル文
第四十六　人ニ雇フ文
第四十七　金子ニ贈フ文
第四十八　小欽ニ友人ニ招ク文
第四十九　祭禮ニ招ゝれ一ニ答フル文
第五十　梅見ニ招ゝれ謝セル文
第五十一　出仕ニ賀セル文
第五十二　摘草ニ人ニ誘フ文

第五十三 桃花ニ贈ル文
第五十四 菜花見物ニ人ニ招ク文
第五十五 木ノ芽天樂ニ飽ル文
第五十六 散歩誘引之文
第五十七 客ニ招きて牡丹ニ賞セル文
第五十八 生糸相場ニ合セル文
第五十九 蠶卵紙之相場ニ報セル文
第六十 茶摘ニ人ニ雇フ文
第六十一 新茶ニ飽ラヌニ謝セル文
第六十二 玉蟬花見物誘引之文

第六十三 藤花見物ニ誘ハレ一ニ參ル文
第六十四 梅雨中安否ニ問フ文
第六十五 梅雨中友人ニ招ク文
第六十六 田植見物ニ人ニ招ク文
第六十七 大雷見舞之文
第六十八 暑氣見舞之文
第六十九 暑中穆檬水ニ飽ラヌニ謝セル文
第七十 納涼ニ約セル文
第七十一 舟遊ニ催セル文
第七十二 氷ニ飽ル文

第七十三 蓮花見物ニ催ス文
第七十四 草花ニ所望ス文
第七十五 所望ニ付桔梗ニ贈ル文
第七十六 芋狩誘引ニ答フル文
第七十七 月見之宴ニ催ス文
第七十八 月見ニ招ク人ニ答フル文
第七十九 松露ニ餉ル文
第八十 生鮭ニ餉ル文
第八十一 菊見誘引之文
第八十二 初鮭ニ餉ラレニ謝スル文

第八十三 菊花ニ贈ラレニ謝スル文
第八十四 鈴虫ニ贈ル文
第八十五 虫聽ニ友ニ誘フ文
第八十六 紅葉遊覽ニ催ス文
第八十七 虫聽誘引ニ答フル文
第八十八 葡萄ニ餉ル文
第八十九 新穀之餅ニ餉ラレニ謝スル文
第九十 梨果ニ餉ラレニ謝スル文
第九十一 雪見ニ友ニ誘フ文
第九十二 雪見之誘引ニ答フル文

第九十三　雪中起居ニ付ル文
第九十四　雪中鴨ニ付餉ヲ送ルニ謝ス文
第九十五　盆栽之石楠花ニ贈ル文
第九十六　寒梅之遊宴ニ付開ク文
第九十七　夜會ニ付催ス云ヲ文
第九十八　蜜柑ニ付餉ル文
第九十九　歳末衣服仕立ニ付注文ス文
第百　歳暮見舞之文
第百一　入學ニ付賀ス文
第百二　昇級ニ付賀ス文

第百三　貸置ノ書籍ニ付取リニ遣ス文
第百四　書籍購求ニ付人ニ託ス文
第百五　質問時刻ニ付含ス文
第百六　文章之添削ニ付頼ム文
第百七　欠席之断ニ付人ニ託ス文
第百八　招キニ付辞ス文
第百九　新宅落成ニ付賀ス文
第百十　新樓落成ニ人ニ招ク文
第百一　開店ニ付賀ス文
第百十二　神社參詣ニ付約ス文

第百十三　秪園會ニ客ニ招ク文
第百十四　祭禮ニ招ラレシニ參ル文
第百十五　酒ニ餉ル文
第百十六　什器ニ借リニ遣ル文
第百十七　書画會ニ人ニ誘フ文
第百十八　画帖ニ借リニ遣ル文
第百十九　書画帖ニ貸ル文
第百二十　安産ニ賀ル文
第百二十一　産後之安否ニ問フ文
第百二十二　醫者ニ賴ム文
第百二十三　友人之病ニ問フ文
第百二十四　病中友人ニ寄ル文
第百二十五　病氣之快復ニ賀ル文
第百二十六　喪ニ吊フ文
第百二十七　年回ニ招ラレシニ參ル文
第百二十八　近火見舞之文
第百二十九　金子ニ借リニ遣ル文
第百三十　種物所望之文
第百三十一　干鰯ニ所望ル文
第百三十二　旅立ニ客ニ招ク文

第百三十三　人ニ贐セラル文
第百三十四　留守ニ人ニ託セラル文
第百三十五　別後之疎闊ニ謝セラル文
第百三十六　久敷滯在ニ一家ヘ遣セラル文
第百三十七　衣服裁縫ニ賴まれ一ニ參ラル文
第百三十八　賴置一事ニ問合セラル文
第百三十九　賣品之事ニ付人ニ通セラル文
第百四十　依賴ニ一品物ニ取リニ遣セラル文
第百四十一　注文之品催促之文
第百四十二　醬油切手ニ贖フ文
第百四十三　石炭油賣捌ニ賴む文
第百四十四　面談ニ乞フ文
第百四十五　傳言ニ賴む文
第百四十六　角力見物誘引之文
第百四十七　留守ニ来リ一人ニ寄セラル文
第百四十八　芝居見物ニ辞セラル文
第百四十九　博物館見物ニ約セラル文
第百五十　幼稚園見物誘引之文

小學文例珠璣卷之二

村田忠恕　編輯

譯語

敎授法

既ニ類語ノ書取畢リタラバ會話ノ言語ヲ書簡所用ノ類語ニ書取ラシムベシ是レ前ノ書取法ト反對ノモノニシテ口上書ヲ綴ラシムルノ階梯ナリ

敎授ノ法前ト異ニシテ類語書取ノ如ク別ニ授

クルヲ要セス唯書取ラシム可キ言語ヲ口誦シ生徒ヲシテ一齊ニ類語ヲ譯記セシム他ハ前ノ教授ト異ルナシ今一例ヲ擧ゲンニ教師口授シテ「ナサレマシ」トハ如何ニ書ス可キヤト云ヘハ衆生徒ハ聽畢リテ各自ニ「ナさレマ」ト譯記スルナル可シ或ハ「ナサレタシ」ト誦シテ「なされた」ト記セシメ或ハ「ツマラナキモノヲアゲル」ト誦セハ「つまらぬ品を上げる」ト或ハ「つまらぬものを」ト記答セシメ若シ誤謬アルキハ教師之ヲ正ス可シ

前ノ如キ單簡ナル譯語ヲ熟シタラバ口上書ヲ書取ル可キ會話ノ言語ヲ誦シテ其意味ヲ譯記セシム可シ假令ハ「晝後三時ノ蒸氣車ニテ横濱マデ參リマス」ト云フ通知ノ書ヲ記セヨト云ヒ生徒ヲシテ「午後三時出之汽車ニ乘ー横濱まで參ります」或ハ「酒ヲ上ゲタイカラ晩ニオ出下タサイマシ」ト誦シテ「酒屋上げる間晩程お出なさい」ト記セシムルナリ

單簡ナル譯語ハ前ノ類語ニ因リ其解釋ヲ口誦シテ書取ラシム可シ故ニ茲ニ贅セズシテ唯口上書ヲ書取ル可キ會話ノ題ヲ擧グ

類題

第一　西洋風ノ凧一枚上ゲマス

西洋形之紙鳶一枚進上いたす

第二　作文ノ題オ廻シ下スッテ有リ難イ

作文之題を廻し下され忝く存ず

第三　梅ガサイタカラオ出ナサイマシ

梅花開き間に杖車成さるべく候

第四　博物館ヘ參リタイカ貴君ハ如何

博物館一覽いたす儀貴意伺ひ申す

第五　箱舘カラ氷ガ參リマシタカラ上ゲ

マス

箱館より到来之氷を献ず申す

第六　明日カラ數學ノ先生ヘ入門致シマス

明日より數學之先生へ入門いたすべく候

第七　此間オ借リ申シタ地圖ヲオ返シ申マス

先日拝借いたし候地図を返却申す

第八　オ手紙ノ趣委細承知シマシタ

仰せ書之趣委細承知いたす

第九　オ約束申シタ博多織ヲオ廻シ申マス

第十　今日畫後ヨリ淺草ヘゴ一所ニ參リタイ

今日午後より淺草へ同伴いたす

第十一　ゴ面倒ナガラ此帶地ヲオ仕立テクダサイ

面倒なゝ此帶地仕立ておくれ

第十二　手紙ヘ貼ル二錢印紙ヲ一枚クダザレタイ

郵便二錢印紙一枚ほしい

第十三　當方カラハ却テゴ無沙汰申テ恐入リマス

私方よりハ却て無沙汰申恐入る

第十四　樹膠ノ壺ヲクダサイマシテ有リガタウゴザイマス

樹膠之壺贈下され有りがたく存ず

第十五　昨日ハゴ馳走ニナリテ有リガタウ存ジマス

昨日ハ御馳走ニ相成有難く存ジ

第十六　桃ノ花ガ咲キマシタカラ一ト枝ゴ覽ニ入レマス

桃花咲出テ間一枝御覽ニ入れ申ス

第十七　昨日ハオ出ノトコロオ勿驚デ恐レ入リマス

昨日ハ御来駕之處甚ダ篠来テ恐入申ス

第十八　別段私ハ憂ヲカイカラオ案ジクダサレルナ

私儀多事ニ罷在テ閑御案ニ預リ申ス

第十九　珍ラシクハナイケレド此品ヲオ目ニカケマス

珍ラシク得共此品御目ニ懸け申ス

第二十　オ手紙ノコトハ私方ヨリオ返辭ヲサシ上ゲマス

御来書之趣當方より御返辭申上ゲ奉ル

第二十一　私ノ大好ノ物ヲ下サレテ有リガタウ存ジマス

拙者好物之品おくり給下忝存ス

第二十二　石版一枚ニ石筆一本ヲ此使ニオ渡

シクダサイマシ

石版一枚石筆一本此者ニ市遣シ給下度

第二十三　今日ハ天長節デゴ同様ニ目出度存ジマス

今日ハ天長節ニ付同様ニ目出度存

第二十四　態トオ人ヲオ遣シクダサレテ有リガタウ存ジマス

態ト市人ニ遣され有ラうく存

第二十五　緋縮緬ノ絞リバナシヲイロ〳〵オ見セクダサイ

緋縮緬之絞り花〳〵いろ〳〵市見せ下度

第二十六　格別ノ事モナイガ明日オ出テクダサイマシ

何等之風情ル絞之花得共明日市迄来下さらく

第二十七　オ頼ミ申シテ置イタフハイカヾデアリマスカ

市頼ム置ク事如何ニ市迄ヤ市伺申度

第二十八　近イ中ニゴ出立ノフソウダガオ贐ニ此品ヲ上ゲマス

近日市旅立之ゝ市贐ゝて此品差上ク

第二十九　長イ間ゴ無沙汰申シタカラゴ様子ヲ伺ヒタイ

久敷ト多ク沙汰申ス間ト様子伺度ク

第三十　昨夜ハ大勢デアガリテイロ〳〵ゴ馳走ニナリテ有リガタイ

昨夜ハ一同罷出種〻ト馳走ニ相成有ラ〻存ス

第三十一　オ製造ノ生糸ハ何所ヘオ賣リニナルカオ聞キ申タイ

ト製造之生糸何レ〻ト賣捌ニ相成ヤト伺ヒ

第三十二　公園ノ遊歩ハ差支ガアルカラオ供ガ出來兼ヲマス

公園之遊歩ハ差支ヲ以テ供ヲ兼ル

第三十三　長崎ヘオ出ニナルノハイヨ〳〵オ定ニナリマシタカ

長崎ヘ之ト出發是ハ愈ト決定ニ相成ヤ奉伺ヒ

第三十四　牛ノ乳ノ賣捌所ヲオ聞カセタタサレテ有リガタウゴザリマス

牛乳賣捌所ト報知ヲ下有ラ〻存ス

第三十五　昨夕カラ虫歯ガ痛ミマスカラ今日ハ欠席致シマス

昨夕より歯痛いまだ一時間今日も欠席仕た

第三十六　此間拝見致シマシタ算盤ノ本ヲオ借クダサイマシ

過日拝見いたした筭術書拝借仕たい

第三十七　新茶ガ出来タカラアゲマスダケカアガッテクダサイマシ

手製之新茶進上仕た所笑味ながら雖有存ず

第三十八　此頃ハ暇デアリマスカラ公園ヘ遊ビニオ出ナサランカ

近頃閑暇なる間公園へ遊歩致間敷や伺ふた

第三十九　オ暇ナラバ晩飯後ヨリ螢狩ニオ供イタシタク存ジマス

所暇になる晩飯後より螢狩に同伴申度

第四十　頴才新誌今日ノ分ガアイテヲリマスナラオ借クダサイマシ

頴才新誌今日之分所明に成て拝借仕度

第四十一　今日ヨリ學校ヘ參リマシタカラ明日ヨリ一所ニオ頼ミ申マス

今日より小学校に同道致申

第四十二　スコシオ話イタシタイカラ一寸オ

出下ダサイマシ

ゆゝしき談一ト段ゝ間一寸ときを未駕ゝ下ゝ度ゝや

第四十三　私ノ家デ今晩カラ讀會ヲ致シマス

カ貴君モオ出ナサイ

今夕ゝ拙宅ゝ讀會ゝ間貴君ゝもときを未駕ゝ下ゝ度ゝ

第四十四　母ノ不快ヲオ見舞ヒ下スッテ有リガタイ母ヨリ宜鋪申シマシタ

母之不快ときを尋ゝ下有ゝゝく存ゝ母ゝもゝゝゝく

ト上ゝ樣ト聞ゝ

第四十五　東京女子師範學校ノ寫眞ヲ貰ヒマシタカラオ目ニ掛ケマス

友人ゝ東京女子師範學校之寫眞贈越ゝ間ときを目ニ懸ケ度ゝ

第四十六　留守ハ中ハ何事モオ世話樣ニナリマスカラ宜鋪オ賴ミ申シマス

留守中ハ万端ときを尼介ニ相成度ゝく間よゝしくときを賴み申ゝ

第四十七　萬國史略ヲクダスッテ有リガタイ尚オ目ニ掛リテオ禮申シマス

萬國史畧贈下さゝれ有ゝゝく存ゝ尚拜顏之上ときを

禮申上ル

第四十八　明日ノ日曜ニ先生ノ所ヘ參リマスカラ貴君モ一所ニオ出デナサラヌカ

明日之休暇ニ先生之所へ參り度存ぜ間貴君ニも如何ぞや伺申上ル

第四十九　態々オ人ニテオ申越ノ事ハ後程オ目ニ掛ツテオ談シ申シマス

伺人ニて態々伺申越之儀ニ後刻拜眉之上伺申上ル

第五十　オ願申シテ置マシタ物理書質問ノ事ハ何時頃ヨリ上ガリテ宜シウゴザリマシヤウカ

願置ル物理書質問之儀ニ何時頃より昇堂仕ル為ニ成合相伺ル

口上書

文例

會話ノ言語ヲ譯記スルノ法充分ニ熟シタラバ往復ノ書簡文ヲ授ク可キナレト書簡文ハ時令ヲ叙シ安否ヲ問フ等ノ語ヲ用ヰル故容易ク筆

ヲ執ルヨリ能ハザルベシ故ニ先ツ口上書ヲ綴ラシメ書簡文ヲ作ラシムルノ初歩トス

口上書ハ書簡文中ノ入事（後卷ニ出ツ）ノミヲ簡單ニ記スルモノニメ略式ノ復略ナルモノト云フ可シ而メ其一篇中一段ナルモノアリ二段ナルモノアリ尚ホ一段ノ中分レテ三四トナルモノアリ左ニ其例ヲ擧グ

梅枝を所望する文

第一例　内庭前之梅花両三枝を所望申度

出席を断る文

第二例　昨夜より腹痛仕候て今日も不参仕

月見に招ぶる文

第三例　獨吐月を賞し候て甚多聊存

間早速昇堂可仕

菊見誘引之文

第四例　菓鴨深井之菊花存寄を別しよく

出来を趣幸明日も休暇之間一覧

仕候

第一例ハ梅花ヲ貰ヒタシト云フ意ニテ單一ナ

ル趣意ナリ

第二例ハ始メニ昨夜ヨリ病ニ罹ルヲ説キ終リニ欠席スベキヲ述ヘテ趣意ヲ二段ニ綴リシナリ

第三例ハ始メニ己ガ月ヲ賞スル様ヲ述ベ次キニ其月ヲ賞スル時ノ思ヲ云ヒテ結末來書ニ應スル意ヲ陳シ一趣意ノ中更ニ小別シテ三段トナレリ

第四例ハ始メニ觀ント欲スル菊ノ場所ヲ擧ゲ次キニ其菊花ノ例年ニ優リテ佳ナルヲ説キ三段俄カニ意ヲ轉シテ己ノ身ノ閑暇ヲ述ベテ結末ニ一覽セント欲スル意ヲ説ケリ此ノ如キ文章ハ大趣意二段ニシテ小趣意ハ四段トス

口上書ノ趣意段落前ノ如クシテ尚完全ナルモノト完全ナラザルモノトヲ擧ゲテ字句順序ノ使用ヲ示ス

第一例　頼置キ物理書此者ニ拜借仰ケられ度キ

月見ニ客を招く文

頼置キ品物拔取リニ遣ス文

第二例　觀月之宴相開き間黄昏より西来駕
　　を下たくき
　　杜丹菜を餉らるる謝する文

第三例　澤山之牡丹菜贈下されたり難く
　　存ぜ
　　旅土産送贈らるる謝する文

第四例　西京土産として贈下されぬ支仙傑
　　一疋有りがたく存ぜ

第一例第二例ハ字句順序ノ整ヒタルモノト云
フ可シ

第三例ハ行文ノ法ヲ欠クト云ノニ非ラザレ𪜈
字句ノ使用未熟ナリト云ノ可シ「澤山」ノ二字
「牡丹菜」ノ上ニ在ルヨリハ「贈下されノ上ニ置
キテ「牡丹菜澤山ニ贈下されたり難く存ぜ」ト改
ム可シ大凡此ノ如キ文字ハ實字ノ形容ニ用ヰ
ルヨリハ虚字ノ形容ニ用ヰ可シ
第四例ハ行文ノ法ヲ欠クト云フ可シ「西京」ノ
上ヘ「より之」ノ三字ヲ加ヘ「支仙傑一疋」ノ五字
ヲ「有がたく」ノ上ニ置カズシテ「贈下され」ノ上
ニ置キ「西京より之土産として支仙傑一疋贈

トされ有り〳〵なりト改メテ始テ字句順序整頓シ完全ノ文章ト爲スヲ得可シ

教授法

始テ生徒ニ口上書ヲ教ヘントナラバ先ツ數篇ノ口上書ヲ掲ケ前ニ示シタル如ク一篇中趣意ノ異リタル句ヲ別チ授ケ次ニ完全ナルモノト完全ナラザルモノトヲ併記シ此文章ハ完全ナリ此ノ文章ハ完全ナラズ此處ノ語ハ削リテ可ナリ彼處ノ句ハ前後シテ可ナリト云ヒテ丁寧ニ字句ノ使用ト文ヲ行ルノ法トヲ教フ可シ

生徒已ニ會得セシ後ハ題ヲ設ケテ各自ニ綴ラシメ綴リ畢リテ作文帳草稿ヲ記スヲ爲ニ豫メ製シ置カシム可キナリニ寫サシメ教師之ヲ取纒メ翌日作文ノ時間迄ニ添削ヲ加ヘテ生徒ニ渡ス可シ時トシテ渡スニ先チチ各生徒中最下ノ文章ヲ撰ミテ塗板上ニ記シ各生ヲシテ互ニ添削セシメ最後ニ至リテ教師之ヲ訂シテ後作文帳ヲ渡スヿモ有ル可シ

授業ヲナスニ題ヲ出シテ作ラシムルヿアリ又一篇ノ文ヲ掲ゲテ其返辭ヲ作ラシムルヿアリ

或ハ屢不完全ノ文章ヲ出タシ生徒ヲシテ互ニ
正サシムルヿモアリ
或ハ時々一篇ノ文章ヲ掲ゲ文中ノ實字或ハ虛
字ヲ削リ生徒ヲシテ塡字セシムルモ作文進歩
ノ一助トナル可シ假令ハ
両三日之中〔算術書拜借〕以来一変ス
〔〕〔拙宅〕〔ニ於テ〕勉強致ス度く候
右ノ如キ文章ヲ出シテ「両三日之中」ノ下「算術
書拜借」ノ字ヲ削リ「某書某品拜借」等ノ字ヲ塡
充セシメ又「拙宅」ノ下ノ三字ヲ削リテ「ニ於テ」
或ハ「〕〔テ」等ノ字ヲ塡充セシメ「〕〔〕」ノ下ヘ
「拙宅」ノ二字ヲ塡充セシムル等ノ類ナリ但シ
此法ハ初メニ用ヰベキモノナレモ生徒一ト通リ
字句ノ働ヲ知リタル後ハ用ヰルモ益少キモノ
ナリ
品類ヲ以テ論スルトキハ請取、送狀等ハ諸證券ニ
屬ス可キモノナレモ記シ得ルノ易キト日常ノ
入用ナルトハロ上書ト同樣ナレバ同時ニ兼子
教フルモ妨ナシ但シ兼子授ケントナラバ後卷
諸證券ノ部ヲ參考ス可シ

類題

第一　新年紙鳶を贈る文

古年玉之表迚紙鳶二夕張進上いたし候

第二　年玉として羽子板を贈らるゝ謝する文

新年之古祝として羽子板贈下され有難く古禮申上候

第三　牌子遊に友を招く文

今晩牌子遊いたし間古出下されたく

第四　春寒見舞之文

未だ寒氣ゆるみ申さぬ間古様子伺度

第五　氏神祭禮に人を招く文

明日八區内之氏神祭に付古子様方古遣し申度

第六　初午之古重之内有つるく頂戴いたし

初午之赤飯を餉らるゝ謝する文

第七　梅見に人を招く文

小庭之梅花稍綻ひ間古来車下され度

第八　梅花を贈らるゝに謝する文

美事なる椿花贈下され早速小瓶にさし樂み申

第九　花見催しの文

隅田堤之櫻最と盛之に明日須古同伴いたし度

第十　友人之觀花を促すに答る文

命之如く花之盛衰ハ一刻をも爭ひを間内同伴ひ奉りを

第十一　彼岸之重之内ニ餉る文

某院彼岸ニ付こうを俵手製之牡丹餅内用ニ掛けを

第十二　筍ニ餉る文

珍敷もゆをなくを潛共堀立るを間庖丁迄進ーーを

第十三　新茶ニ餉る文

手製之新茶少ゝ差上を間内笑味下され度を

第十四　初茄子ニ餉る文

菜園之茄子初成りを間少ゝ内覽ニ入れを

第十五　松魚ニ餉らるゝニ謝する文

美事なる松魚贈下され早速拜味可仕先ず内禮を如此を

第十六　納涼誘引ニ答ふる文

近日より之暑氣實ニ矮屋ニハ凄兼を間内供仕る奉りを

第十七　螢狩誘引之文

今夕ハ月ニ乘ーー撲螢之遊ニ催ーー度内誘引申上を

第十八　枇杷ニ餉る文

内ゝ樣内慰とーーて枇杷一籠進ーー申を

第十九　松蕈を餉らるゝに謝する文

松蕈澤山ニ内贈下され早速拜味仕る奉りを

第二十　野菜を贈る文

栽園に仕分け九面芋に笑種に成り掛け

第二十一　秋海棠を贈る文

後園の秋海棠美事に咲き間両三株呈貴覽

第二十二　樽柿を餉る文

手制の樽柿一籠に覽に入れ何卒に風味を下され

第二十三　爐開に客を招く文

明日を爐開以来一日間に拝駕下されん

第二十四　夜學を催す文

追々夜長くなる相成り間夜學催し度思召相伺ふや

第二十五　柚實を餉る文

果園の柚子今年は過分に養ひ間一籠に懸け

第二十六　雪中水仙花を贈る文

雪中の慰として水仙花両三株に懸け

第二十七　入學を一統通知する文

今日より入校以来一日間に知らせ申さ

第二十八　書籍を借りに遣す文

此程に求の文例珠璣両三日拝借仕度

第二十九　算術の答を贈る文

先日の問題を答式出来の間呈上仕

第三十　試驗の時日を問合する文

貴校之大試驗ハ幾日頃ニ成ラヤ日限相伺ヒ度ク

第三十一　寄留替通知之文

都合ニより何町何番地ヘ寄留替仕ル間ニ風聽申上ク

第三十二　轉宅ニ賀する文

昨日ニ首尾能く轉宅相濟ミ一ニ日出度存ク

第三十三　安否ニ問ふ文

久しく御尋申上ケ候ル間ニ様子相伺度ク

第三十四　牛肉を餉る文

到來之牛肉新製ニ付間些少ながら福分申上ク

第三十五　寫真ニ贈る文

兼ねて約速申上ク寫真郵便ニ付一拜呈仕ク

第三十六　来話を乞ふ文

徒然ニ付間若し御閑暇ニ付ば御来話下されたく

第三十七　出立之時日ニ問合する文

大坂ヘ之御出帆ハ幾日頃ニ御決定ニ相成ラヤ奉伺ク

第三十八　別後友人ニ寄する文

其後ニ如何ニ成ラヤ定ニ勉強之事と羨しく存ク

第三十九　歸宅ニ告ぐる文

昨日上國より歸宅以来一度間ニ通知申上ク

第四十　雜誌ニ借りニ遣する文

教育新報に明きを少し拜見いたしたる

第四十一　外國新聞に贈る文

倫敦新聞着いたしたる間に覽に入れ申す

第四十二　漁魚に餉る文

今日川狩の冬りの處業外に勝負有之に間に福分申上る

第四十三　煙灯に送る文

昨夕昇堂之者拜借いたし煙灯唯今返上仕る

第四十四　仕事始を賀する文

に娘子樣昨日より仕事始之に日出度存る

第四十五　乾海苔に餉るに謝する文

淺草海苔澤山に餉りてされ万し奉謝る

第四十六　人に雇ふ文

下女一人雇度に間何卒に世話に下度る

第四十七　金子に贈る文

に依頼之金子何圓他より用達持たせさし上る

第四十八　小飲に友人に招く文

雨中多聊に間小酌いたし度に賁臨奉願る

第四十九　出仕に賀する文

先日に某官に拜命之趣に栄譽之段万し奉賀る

第五十　祭禮に招んに答ふる文

明神祭禮に付て供へ物使はされ有り難く存じ奉る遠慮なくさしつかへ申す

第五十一　梅見に招かるゝを謝する文

庭前の垂梅開花に招きたまはれ昇堂可仕

第五十二　摘草に人を誘ふ文

天氣も打續き申す間、基邊摘草に参り度依て御誘ひ申上る

第五十三　桃花を贈る文

鄰翁より贈越る桃花叢敷に付て得る所両三枝に月に懸け申す

第五十四　菜花見物に人を招く文

南圃の菜花美事に咲き得る小樓にて一盞呈度に来駕奉待る

第五十五　木の芽田樂を餉る文

手製の田樂不調理なれ共得共少く御覧に入れ度に笑味なされて幸甚

第五十六　散歩誘引之文

今日は稀なる快晴に付上野公園より日暮邊遊歩仕候間御誘引申上る

第五十七　客様招きて牡丹様賞する文

小庭の牡丹盛りなる間明日ごろ一盞呈し度午後より
ごろ来られ下度度

第五十八　生糸相場様お尋ねする文

生糸の相場本年は如何ほどなるやら通知下され
度由願申上げ

第五十九　蠶卵紙の相場様報する文

本年は外商多く入込む故大に蠶卵紙の相場引上
げ間思召しの程ハ遣し成さるべく

第六十　茶摘に人様雇ふ文

茶摘相始る處雇人不足にて手廻兼る間二十人程
ほど周旋下され度

第六十一　新茶様餉らるるに謝する文

ほど製の新茶早々と贈下され忝存ず早速拝味
仕るべく

第六十二　玉蟬花見物誘引の文

堀切の玉蟬花盛りなる得る明日頃ほど見物如
何ほどや故障なくば同伴仕り度

第六十三　藤花見物に誘ひ参る文

目黒の藤花兼て盛の趣聞及び得共同伴の者無

之故羨扣居ケ貴君ヒ出ラレ〻ヒ供仕ス

第六十四　梅雨中安否ヲ問フ文

梅天兎角欝陶敷事ヲ慰共別段ヒ障ル事ヒ有ラ

ヒ様子伺ス

第六十五　梅雨中文人ヲ招ク文

連日之雨天兎角淩然ラ間ヒ来話下サレ度奉希ル

第六十六　田植見物ニ人ヲ招ク文

追〻田植之時節ニ相成日〻賑ハヒ間ヒ見物ヲ〻ヒ来

車賀之ス

第六十七　大雷見舞之文

今暁ヒ内近所ヘ雷落ツ一ヲ〻別段内儀我等ハ

無之ヒ存ヲ〻ヒ様子相伺ス

第六十八　暑氣見舞之文

而之日ヲ別ニテ暑氣相募ル間如何ヒ暮ニ成

ラ〻ヒ機嫌相伺ス

第六十九　暑中穆樣水ヲ餉ラ〻ニ謝ス文

暑中ヒ見舞ヒ〻テ穆樣水一瓶ヒ餉下サレヒ懇之

段万〻奉謝ス

第七十　納涼ヲ約ス文

近日之暑氣中〻夜分ニ至リテモ涼葉ヲ分ケ〻黄昏ヨ

り両國邊納涼如何ゝ哉や内返辞奉伺候

第七十一　舟遊ニ催ス文

両三日以来之暑氣ハ迚も籠屋ニて法華ニ問避暑旁舟遊ニ可ㇾ申ㇾ候貴意奉伺候

第七十二　氷ニ餉ス文

函館より到来之氷室中之珍物と存ル間些少ニ差内日ニ懸ケ候

第七十三　蓮花見物ニ催ス文

不忍池之蓮花満開之由聞及ル幸ひ今日ハ清暑ニ聞内園伴申ル候

第七十四　草花ニ所望ス文

内手ハ之女郎花最ト美事ニ候間両三株内参心以為ㇾ

第七十五　所望ニ付桔梗ニ贈ル文

野花ニ所望ニ付ル然ト上不申ル変ニ所望ニ付直ニ内使ニ付一ㇾ申ル

第七十六　茸狩誘引ニ答ふる文

茸狩之内催一ㇾ極面白き事ニ内存ル畢速内回伴仕ル可く内返辞と如斯ニ候

第七十七　月見之宴ニ催ス文

今宵小中秋の間親友を集ひ某樓に於て觀月之宴相開き二首貴意奉伺候

第七十八　月見に招れ侍るの文

月見之日招とかゝる雅く招れ幸い獨坐之無聊を慰ん早速日暮出仕奉候

第七十九　松露茸飯の文

昨日家内お連れ茸狩に参り候處思之外澤山に採り候間配分申上候

第八十　生鮏茸飯の文

到来之鮏魚幸い新鮮之間坐ぶとう進ぜ申候

此風味下されて本望之事に候

第八十一　菊見誘引之文

某地之菊花例年に勝りて美事に候へ幸明日は休暇に候間一覽致度申貴意伺候

第八十二　初鮏を餉られし謝礼の文

初物之生鮏宝ゝ美味に候へ何れ此至尊之上此禮申上候

第八十三　菊花茸贈られし謝礼の文

美事なる菊花一と鉢然に贈下され此厚き意之段有難く奉謝候

第八十四　金琵琶に贈る文

後園より捕らえ来る鈴虫に息女様に贈りて様娘より中出で問持たせ遣はす

第八十五　虫聽に友に誘ふ文

例年之通り日暮道灌山之邊は虫之音盛なり近く之中清夜を撰て俱申なり

第八十六　紅葉遊覽に催す文

海安寺之霜葉近時盛に染出たり明日頃に遊覽如何やに伺申す

第八十七　虫聽誘引に答る文

虫聽之に催し最と風雅之事にて拙今より期待に誘引下されたく

第八十八　葡萄に餉る文

到来に任せ様之に奥として白葡萄一と籠に目に懸け

第八十九　新穀之餅を餉られに謝する文

苟揚之に祝贈下され毎度に手早之程に美敷存ず

獨に目に懸り に禮申す

第九十　梨果を餉られに謝する文

玲敷梨果澤山に贈下され有難く存ず拙に果

之上万〻陳謝する文

第九十一　雪見に友を誘ふ文

今朝より雪〻四面銀世界と疑はるゝ如何に乞
り墨江之舟遊ハ思召寄之や貴意伺奉る

第九十二　雪見之誘引に答る文

雪見之思召寒中参り之遊と存ず早速伺仕
仕度旨返辞する如此

第九十三　雪中起居を問る文

一両日を餘程寒氣お募り候て皆様之御容子如何
なる哉伺ひ奉る

第九十四　寒中鴨を餉らるゝを謝する文

寒氣に見舞ひて真鴨二羽贈下され忝存る家内
共一同参異る〻を聞先〻に懸念を下閣敷

第九十五　盆栽之石楠花を贈る文

春中より手入仕り一此程より一開き申候間先老人之に
慰に成る事と存じ候に入れ申

第九十六　寒梅之遊宴を開く文

庭前之寒梅南枝ハ六七分開き申候間友人お會一一盞
催度依る由先駕奉願

第九十七　夜會を催に答る文

追て日経るまゝ成日中ゝ之分之勉強も成兼て屠蘇昇
進の因意仕り兼く候迚辞退斯の如くこゝ

第九十八　審相談飾る文

雲州之近辺より態て送り越しを得ゝ軽微なるこゝ美上
を候笑味なされて幸甚

第九十九　歳末衣服仕立談注文する文

定て多忙に候へ共何卒此美操下さん此帯地に付ては
なん、度候頼ゝ申や

第百　歳暮見舞之文

追て月向に相成候へ共取迎に参いん聊歳暮美之候見舞

て塩引二尺進呈仕る

第百一　入学祝賀する文

貴子息様此程に入学之ゝ定て出精之事と存る聊
ら祝として小学入門一冊進上仕る

第百二　昇級祝賀する文

令嬢此度之定規試験に候卒業之趣最と甘出度存
聊祝として教女規範一本進呈仕る

第百三　貸置し書籍を取りに遣す文

兼て美上置る某書唯今入用る間暫時に迚却下
されば一覧後み美上申兼る

第百四　書籍購求を人に託する文

明日の愈に出京するゝ何共に手數を得共其書一部に購求下されて奉希

第百五　質問時刻に問合する文

過日頼置の書籍質問之義に何時頃より昇堂仕度存ずるに付に都合奉伺

第百六　文章之添削に頼む文

宿題之文章ようゝ出来の間差上申は何卒十分に添削下されて度お願ひ

第百七　欠席之断を人に託する文

感冒之為平今朝より頭痛ゝ出席仕兼の間宜敷に取計下されて度奉願

第百八　招きに辞する文

に招に応じ難く折悪く他用有之昇堂仕兼の間悪しからず思召下されて度

第百九　新宅落成に賀する文

に心懸之新樓此程に落成之趣存ずる此上ゝ得共鯉一尾に祝ひ上

第百十　新樓落成に人に招く文

兼ての造營此程功に竣の間新樓に於て友人に會

度に足労なるに付貴臨下され度き

第百十一　開店に賀する文

明日を愈に開店之上に付出度存ず此品茶未なる
に祝之印迄拜呈仕る

第百十二　神社参詣に約する文

明日を氷川神社例祭之趣を聞参拜いたし貴
君を思召如何ぞや伺ひ

第百十三　祇園會に客に招く文

明後日を祇園會を煉物躍矢臺等出る間に付
方に遣し成さるべく

第百十四　祭禮に招れし客に答る文

明神祭禮に付て供に使されし行き難く存ず
なるべく差上申べく

第百十五　酒に餉る文

大坂所在勤之友人より伊丹之銘酒を贈られ一瓶差上申べく

第百十六　什器に借りに遣る文

明日を客来て少し指に付て烟草盆五組屏風
一雙拝借仕度に願申す

第百十七　書画會に人に誘ふ文

来る幾日を某樓にて書画會有之に付見物如

何ゝに啓ゝや貴意伺ふ

第百八　画帖を借りに遣す文

先ゝ頃ゝ以来ゝ椿山の花鳥ゝ御見使を以て御所ゝ

第百九　書画帖を貸す文

古望ゝ任せ書画帖二帖に使に付ゝ差ゝし上ゝ慰に御ゝ

第百十　安産を賀する文

今朝ゝに新造様に安産之ゝ孫に男子ゝ出来ゝ

之に書に察ゝ上ゝ祝之印迄ゝ鯛二尾進上仕ゝ

第百十一　産後之安否を問ふ文

古内室に産後ハ如何ゝ遊ゝや迄ゝ日立之事とハ存ぜ

ず様子相伺ふ

第百十二　醫者を頼む文

両三日前ゝ御卧居ゝ間何卒に探今之上に神診を仰ぎ

ゝ以上

第百十三　友人之病を問ふ文

久敷伺ゝ申ゝ候ゝ得共兼ゝ之に病氣如何ゝ成ゝ

少ゝ之に快くゝ成ゝ之使を以て御容体を伺ふ

第百十四　病中友人に寄する文

四五日前より微恙之為引籠居る處佳然る甚困却
つゝ出る間に話に出下されたる
第百十五　病氣之快復を賀する文
兼ねて之に病氣退くに本復して此程に來上けも相濟
まるに芽出度存ぜる
第百十六　衰弱吊ふ文
大人に逝去之趣驚駭仕る一族定て悲歎之事と察
る稱後刻昇堂餘哀可陳
第百十七　年回に招ぜられに參る文
先妣に年回に當られる拙者まで（に）使下されに

第百三十一　干鰯我所望候文

今年ハ自家之耕地肥料ハ少ク不足ニ付間干鰯五六俵頂戴以ノ一度ハ頼ム

第百三十二　旅立ニ客我招ク文

数遠ク俞明後日ヲ定ル間留別之一盞呈度今年后五時頃ヲ光来下サレ度

第百三十三　人ニ贈ル文

俞明日ハ出発足之趣此品為来ハ得共餞別ヲ印ニ一番上仕ル

第百三十四　留守我人ニ託ル文

商用之為来ル幾日長崎ヘ数遠仕ル間留守中万事ハ依頼ム度幾重ニモ配慮下サレ度頼ム

第百三十五　別後之疎闊我謝ル文

永来ハ音ニ打過ム深ク恨ル一回ハ会ル出ナクヤ疎ル之謝罪旁ハ左右ハ何ト

第百三十六　久敷滞在志一家ヘ遣ル文

貴地滞在之節ハ永ク厚情万ニ奉謝ル此品軽微ナル一ハ挨拶之節迄ニ進上ノ一ル

第百三十七　衣服裁縫我頼ム一ニ答ル文

諸方ヨリ之ハ誂之仕立物美文屋ヲ得共何ノ美操可申

先ゝ内預ヶ置ル

第百三十八　賴置一事ニ付問合ル文

昨日預置ル一件如何ゝ内ニ成ル哉万事都合宜敷ク以リ
ヶ置ク内返辭奉伺ル

第百三十九　賣品之事ニ付人ニ通ル文

上海へ遣ス一賣品ヲ大ニ拂合ヨロシキヨシ申越
ル間内知ラセヶ上ル

第百四十　依賴ス一品物ヲ取リ遣ス文

過日相預置ル品物如何ヶ哉ヤ方辨居ル今此者へ内遣ハ
シ下サレ度ル

第百四十一　注文之品催促之文

先日内賴申置ル物品今以テ出来ヲ上ル甚ダ遲
ル間早速ヲ遣ヲ探内取計方之ヲ願ル

第百四十二　醬油切手ヲ賣ル文

五升之醬油切手三枚用ヲ間此者ニ内遣シ下サレ度ル

第百四十三　石炭油賣捌ヲ賴ル文

此度拙宅ニ於テ石炭油商ヒ相始ル間今後何卒内賣
捌之段内賴ヶ上ル

第百四十四　面談ヲ乞フ文

内面談ヶ義有之ル間其方卧居ル間何卒内探合

之上に奉加為下され度奉希る

第百四十五　傳言を頼む文

先刻之一條何卒貴君より傳へ下され度勝手ながら相願ひ申す

第百四十六　角力見物誘引之文

此度之角力は随分評判よろしく候間明日一見仕度貴意如何ぞや内誘引申上る

第百四十七　留守に来り一人に寄る文

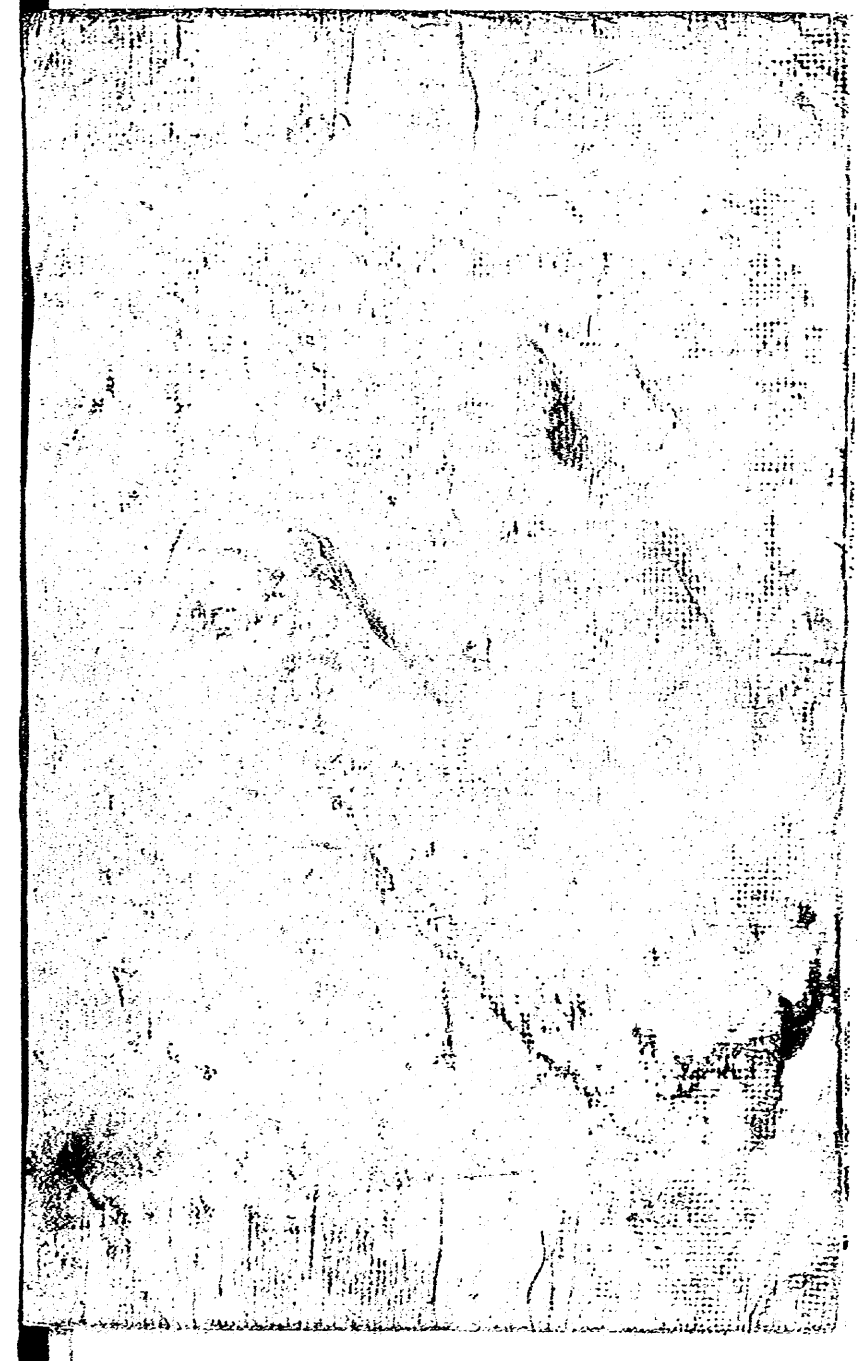
過刻は内狂車之趣お忘れ留守中に甚失礼何卒之内用向に内ぞや使を以て申聞度

第百四十八　芝居見物を誘ふ辞令文

芝居見物内誘引に参り度閣共試験前に付暇なく候間先々内断申上る

第百四十九　博物館見物を約する文

前宵内談之教育博物館一覧之義幸明日は休暇に付間内同道申度

第百五十　幼稚園見物誘引之文

東京女子師範学校之幼稚園追々盛大之趣近日之中一覧いたし度